



笠松の偉人

やま だ とつ さい
生誕201年 笠松の天才画人「山田訥齋」

◆◆ シリーズ④ ◆◆

—幕末を生き抜いた能力と知識のゼネラリスト—

山田訥齋は1814年(文化11年)に笠松に生まれ、江戸末期から明治初期の激動の時代を生き抜いた郷土の偉人です。

訥齋は幼少の頃に薬屋だった父を亡くし、母に育てられました。よく勉強し、性格も温厚で品行方正な青年でした。この頃から多岐にわたって、ゼネラリストとしての才能を遺憾なく発揮しました。書画は広瀬春樵しゅんしゅうに学び、さらに山本梅逸ばいいつに入門し、画風を磨きました。訥齋は山水画をもっとも得意としていましたが、詩文をはじめ篆刻や囲碁、茶道、和歌も巧みでした。まさに多方面の能力と知識を持つゼネラリストでした。

また、芸能に対する熱意も大変厚く、名古屋に虎が来たと聞くと遠路なのにすぐ虎を見に出掛け、写生をしました。

訥齋の山水画の技量が次第に高まると、書画を買い求める人が全国から殺到しました。1日に

数十幅もの作品を描くこともあったということです。

訥齋の人となりは温厚で落ち着いており、みだりに人に逆らうことはありませんでした。しかし、正しいことを正しいとしなかったときには目をつり上げて、自分の意見を主張しました。

晩年は大切な友人と静かに語り合い、悠々と余生を送っていました。

訥齋は明治6年1月28日に、60才で病死しました。お墓は司町の福證寺ふくしょうじにあります。

詳しくは、町ホームページ(「モラルセンス一覧」)で検索<No.11>をご覧ください。



雪中溪山澗画
笠松町歴史未来館所蔵
(寄贈者 白井弘行氏)

かきまつの民話「誓願寺の門前市」⑤

「来月まで待つてもらいやあ、ええのをさがしてきますわ。」
門前の二人の店もよく繁盛した。
これに目をつけた宝江の茶わん屋や、岐阜の魚屋、それに、お春らからさそわれた仲間もここに店を出した。
「えーいらっしやい。いらっしやい。日本一のわた菓子...」
「こちら、このかいわいの水あめだよ。その坊はなたれとらんと、たんと食べて大きゅうなれや。」
客よせの声も明るい。
誓願寺の灸の日の、出店の話は、灸の客の口から口へとひろがっていった。
店も多くなり、境内だけで

は並びきれず、柳原の通りいっぱいとは本町通りは法伝寺のあたりまで市が並んだ。
いつのまにか人々は、「誓願寺の灸の市」と呼ぶようになった。この日は買い物だけを楽しむ人も多く、笠松の町は朝から晩までにぎわうようになっていった。
戦争がはじまって物がたりなくなると、さすがににぎわった市も、自然にさびれていき、なくなってしまう。今は、木戸の焼きだんご屋もなくなってしまうが、誓願寺の灸だけは、毎月十四日に続いている。

おわり

